〈研究・調査報告〉

相談援助実習における実習記録の指導に関する研究
―教員・指導者・実習生３者共有の視点に焦点をあてて―

小川　智子　・　清水　正美

【要旨】

本研究は、相談援助の実習記録について、教員・指導者・実習生の 3 者共有の視点に基づく指導のあり方をまとめたものである。

最初に、実習記録指導の現状と課題について 3 点から精査を行った。第 1 に、指導の特徴と役割をテキストから抽出した。第 2 に本学の実習記録指導に関する指導内容を整理した。第 3 に、指導者、実習生が感じる記録に関する課題の整理を行った。これらのことから実習記録指導の課題は、3 者が異なる基準で指導を捉えていることから生じている可能性が高かった。

そこで、ソーシャルワーク実習研究会において、教員と指導者で「実習記録に求められる指導基準」を明らかにするために、(1) 文章形式、(2) 実習ノートの表面（1 日の目標と取り組み）、(3) 実習ノートの裏面（目標に沿った考察）についてそれぞれ検討を行った。その後、この研究成果を実習生に示し、教員・指導者・実習生の 3 者で共有できる指導マトリックス表を作成した。

今後の課題は、マトリックス表を活用しながら、継続的に 3 者で検討し、実習記録指導のあり方について精度を高めることである。

キーワード：相談援助実習、実習指導、実習記録

１．はじめに

社会福祉士及び介護福祉士法（以下、社会福祉士法）制定から 20 年後の 2007 年に法改正が行われ、福祉ニーズの多様化に対応できるよう実践力のある社会福祉士養成が目指され、教育内容についても再編成されることになった。特に実習に関しては、福祉系大学にも実習指導体制の基準が明示されたが、具体的な指導内容については様々な課題が見られる。特に実習記録については法改正前から課題として指摘されてきた[1]が、具体的な書き方については、実習担当教員（以下、教員）、実習指導者（以下、指導者）個々の指導に委ねてきた現状がある。この現状による指導は、実習生を混乱させ、記録の不備が実習評価にも大きく影響する

要因となっている。しかし、法改正後の実習指導体制の観点から考えると、この課題は教育現場と実践現場との指導に関する連携不足の問題であり、そのためには双方で指導内容を協議することが必要である。

論者らは、法改正後の実習指導の質の向上を図るため、これまで指導の柱とされているマネジメント、プログラム、スーパービジョンについて指導者と検討を重ねてきた（小川・清水，2014）。さらに、連携した指導を行うために、2013 年度には教員と指導者が共に実習指導のあり方について研究を行うために、「ソーシャルワーク実習研究会」（以下、研究会）を開催し、事前指導のあり方について検討を行った。その中でも実習記録の書き方の課題が示された。具体的には、的確な文章となるために話し言葉と書き言葉の区別を行い、誤字脱字をなくすこと。日々の目標の記入の仕方を理解すること。記録が感想文にならないよう記載するために、分析や考察が行えるようになることなどが挙げられた（小川，2015：72）。

これらの課題に対応するためには、教育現場の事前指導と実践現場が求める指導を刷り合わせる必要があるため、第 2 回研究会において、教員と指導者による「実習記録に求められる指導基準」について検討した。その後、研究成果を実習生に示し、教員・指導者・実習生の 3 者で共有できる指導の枠組みのマトリックス表を作成した。

本稿では、最初に実習記録指導の現状と課題を示し、教員・指導者・実習生が検討した実習記録指導のマトリックス表を提示することを目的とする。

２．実習記録の指導の現状と課題

実習記録指導の現状と課題について検討するために、教員と指導者のテキスト、大学での指導の現状、指導者と実習生が感じる記録上の課題について整理し、実習記録指導の課題について明らかにする。

２．１．テキストにみる実習記録の指導内容

教員と指導者それぞれの実習指導に関するテキストから実習記録における指導内容を整理する。

川上は、教員向けの実習指導のテキストにおいて、実習記録の意義を以下のように提示している（川上，2009：189－190）。

(1)「実習成果の自己確認」

実習目的を達成するために現場の体験を通して知識、理論を検証し、振り返り、何が学べたのかを確認し、翌日の実習へとつなげる。

(2)「実習指導者とのコミュニケーションツール」

実習生の学習内容の把握、取り組み姿勢、戸惑いなどを理解する。

(3)「実習担当教員のスーパービジョン・評価ツール」

実習巡回指導時の指導の道具、実習終了後に確認を行い評価するための資料の一つとなる。

(4)「福祉専門職としての記録作成業務の訓練」

ソーシャルワーク実践時に記録作成を通して援助方針を立てること、チーム内の情報共有を行うための訓練となる。

一方、実習指導者のテキストで村井は、実習記録を指導する視点として以下の 4 点を挙げている（村井，2014：267)。

(1) 事実と考察が書かれているか。

(2) 記録が利用者や職員の言動に限定されてしまい実習生の行動にふれられていないなど一方向からになっていないか。

(3) 記録を通して基礎知識の確認を行い不足部分は指導を行うこと。

(4) 書いたこと書かなかったことに対する問いかけを行うこと。

これらの内容から実習記録の活用は、実習生、指導者、教員それぞれが行うものであることが確認できる。実習生は自身の学びの振り返りを行い、指導者は実習生の学びの成果や学習過程の中で生じる疑問などを把握し、教員は実習生の実習内容、指導の理解状況の把握を行い、評価の道具として活用している。

また、教員と指導者のテキストから共通して取り上げられていることは、「実習記録指導の中心は、事実と見解が含まれる考察を行うことができるよう指導すること」である。実習記録で重要なポイントとなる考察とは何を意味するのであろうか。考察とは、「物事を明らかにするためによく調べて考えること」（新村編，1991：861）である。実習記録の中で考察することは、実習で学んだことを明らかにするために学んだことをよく調べることといえる。また、調べるとは、「かれこれ照らし合わせて考える」（新村編，1991：1308）ことである。実習の中で照らし合わせる対象となるのは、大学での事前学習を通して得た知見、要するに専門知識と専門技術、価値と倫理と考えられる。

すなわち実習記録で考察するということは、「職員の実践、実習生自身の実践について観察や取り組みを行い、そこで起こった事柄を大学での事前学習で得た知見と照らし合わせて、よく考えること」と捉えることができる。

以上のことから実習記録は、3 者が活用するものであり、実習内容について考察できるようになることが指導の重要な点であることが確認できた。次にこれらの指導が実際に本学でどのように行われているのか整理し、検討する。

２．２．本学の実習記録における指導内容

実習記録については、厚生労働省の相談援助実習指導の「教育に含む事項」として、「実習記録ノート」への記録及び記録方法に関する理解が挙げられており、本学の実習指導における授業の中でも実習記録について時間を設定し、指導を行っている。

1 年次の「ソーシャルワーク基礎実習指導」（後期週 1 コマ）の中では、第 12 回目の授業を「ソーシャルワーク実習の事前準備　記録の方法」としている。また、2 年次の「ソーシャルワーク実習指導」（通年週 1 コマ）では、第 6 回目授業に「自己紹介書の作成をする」、第 7 回目の授業に「実習計画書の作成～実習計画書作成の意義と作成方法を理解する」、第 8 回目の授業に「実習計画書の作成～目標設定を行う」、第 9 回目の授業に「実習計画書の作成～課題達成の方法を理解する」、第 14 回目の授業で「実習ノートの理解～記録の意義、書き方、取り扱いについて理解する」とし、実習記録に限らず実習に関する書類等の作成全般において指導を行っている。

さらに授業内では授業内のフィードバック等を題材として事実と考察を分ける取り組みを行う指導、記録の意義・活用方法について説明を行い、ビデオなどを活用しながら、場面を切り取り、深く考察する方法について指導を行っている。

具体的な実習記録に関する指導の内容は、実習ノートの書式に沿う形で行っている。本学の実習ノートは 1 日の実習について表面と裏面で構成されている。表面には、1 日の目標と 1 日の実習の取り組みと指導、注意を受けたことを時系列に記載する。裏面は、1 日の目標に対する振返り、考察、明日の目標を記載する。

特に、「文章形式に沿った書き方」を行うために、主語と述語の関係や誤字・脱字について指導を行っている。また、「実習ノートの表面」については 1 日の目標の記載方法、1 日の実習の取り組みの記載の方法について指導を行っている。さらに、「実習ノートの裏面」については、実習内容の事実と考察の書き方の指導を行っており、最後に「個人情報に関する指導」を行っている。

以下が、その具体的な指導内容として提示しているものである。

・実習ノートの書き方のポイントは、実習生の実習場面を見ていない者が、ノートを読むとすぐその場面がイメージでき、理解・納得できるような表現を心がける。
・実習ノートの表面は一日を時間ごとの分けて主な出来事（支援内容）とその出来事を行う上でのポイントや注意事項などを書いていく。
・実習ノートの裏面は、表面で主な出来事で振り返るべき事項について、①その場面を詳しく書く、②その場面の利用者の思いや行動の意味などについて自分なりの考察、実習指導者からのアドバイスなどを書く、③そこから見えてきた課題を明日の目標に設定する、という組み立てで書く。
・毎日立てる実習の目標設定に困難が生じる場合は、実習ハンドブックに掲載されている大学実習プログラムの週ごとの具体的な目標とその内容を再度確認する。目標を立てるにあたっては「具体的な内容」を自分自身が行っている実習内容と照らし合わせて立てるのも一つのヒントとなる。また、実習計画表をもう一度点検し、実習施設より提示されている実習プログラム日程表も参考になる。

以上のように、教員も記録の書き方についての指導をなるべく具体的に行い、実習生の理

解を促進できるような指導を意識しているものの、実習中や実習後の振り返りでは必ず指導者、実習生から記録の書き方についての指摘や戸惑いがみられる状況が続いている。

２．３．指導者と実習生が感じている記録に対する課題

教員は学内で記録に対する指導を行っているが、指導者、実習生から記録の書き方について指摘や戸惑い等の課題が生じており、これらの課題を整理していく。

２．３．１．指導者が感じる記録の課題

本学では年に 1 度、教員の巡回指導を振り返る学内実習反省会と指導者と教員とで実習に対する意見交換を行う場として、実習意見交換会を開催している[2]。その中で出された記録に対する課題を文章形式、実習ノートの表面、実習ノートの裏面に分けて整理した。

(1) 文章形式

文章形式については、「誤字・脱字が多い」、「鉛筆書きにしている」、「思いつきで書いており、口語体の文章もある」との指摘があった。基本的な文章の書き方、実習記録が公文書の位置づけであるとの理解が不足しているといえる。

(2) 実習ノートの表面（目標と一日の取り組み内容）

表面は、その日の実習に対する目標を設定し、一日を時系列に追いながら主に取り組んだ内容と取り組むに当たってポイントとなることを記入することとなっている。しかし、「一日の取り組みが単なるスケジュールを示すだけになっており、指導内容や課題等を詳細に書かれていない」との指摘があった。

(3) 実習ノートの裏面（考察部分）

裏面は、考察する部分であるが、「観察はしているが考察ができていない」、「利用者との関わりにおいて考察が足りていないため、状況とともにその背景にも考えが及ぶ必要がある」、「支援の過程が記されていない」等の指摘があった。

以上のことから、指導者が実習記録に関して感じている課題は、「基本的な文章の書き方ができていない」、「考察部分が深められておらず感想文になってしまっている」ということがいえる。

２．３．２．実習生が感じる記録の課題

これまで、実習記録に限らず、実習に関する課題の提示や共有については教員と指導者の 2 者間で協議してきたが、両方から指導を受ける実習生がどのようなところに難しさや課題を感じているのかについて状況を把握し検討する視点が抜けていた。今回は、実習生

自身にも記録に関してどのような課題を抱えていたのか、実習終了後にアンケートを実施した。対象学生は26名である（実施日：2014年1月21日）。

(1) 記録にかかる時間

30分	60分	80分	90分	120分	150分
1人	7人	1人	4人	11人	2人

「記録にかかる時間」については、「30分程度」が1名、「60分程度」が7名、「80分程度」が1名、「90分程度」が4名、「120分程度」が11名、「150分程度」が2名であり、半数以上の実習生が毎日90分から120分程度の時間をかけて記録を作成していたことが分かった。

(2) 文章形式

文章形式においては「修正の仕方が大学の指導と違った」ことが挙げられた。

(3) 実習ノートの表面（目標と一日の取り組み内容）

表面においては「目標の立て方が分かりづらかった」、「一日の取り組みの内容の記入の仕方が分からなかった」と、そもそもの目標の設定の方法とともに、一日の実践をどのように、どのような流れで書き落としていけばよいかわからなかったことがみえる。

(4) 実習ノートの裏面（考察部分）

考察においては「日数が経過する中で毎日同じ内容になってしまった」、「考察の書き方が分からず、日記のようになってしまった」とのことであった。毎日同じ支援内容に慣れていくうちに、考察についても様々な視点で書くことが求められるはずであるが、実際には同じ内容の繰り返しになってしまったようである。また、考察しそのことを書き落とすことの意味や方法が分からず、感じたことをそのまま記載する日記のようになってしまったことも見えてくる。

以上のことから、実習生が実習記録に関して感じている課題は、「教員と指導者で異なる指導方法」、「日々の記録の考察のあり方」ということがいえる。

２．４．実習記録指導の課題

前述したように、教員は、文章の形式、事実と考察の書き方について指導を行っている。しかし、指導者は記録の課題として、基本的な文章の書き方、考察部分が十分ではないことを指摘している。一方で実習生は、教員と指導者が異なる指導を行うために混乱し、考察の書き方がわからないと述べている。

なぜ、このような課題が生じているのであろうか。教員が事前指導で行っていることと現場の指導者が行う指導が異なっており、その指導の中身を明確化することが必要となるのではないだろうか。

田中は教育評価の中で、「規準」と「基準」を設定することの重要性を指摘している。「規準」とは教育目標であり、「基準」とは、教育目標に対する具体的な評価項目、つまり何を達成することができれば目標に到達するのかを示すものである（田中 2008：136）。これを実習記録の指導で考えてみると、指導目標となる規準として以下の 3 点を挙げることができるのではないだろうか。①実習記録を形式に合わせて記入することができる。②実習ノートの表面の中で 1 日の目標と 1 日の取り組みを記入することができる。③実習ノートの裏面の中で事実と考察とを分けて記入することができる。そのため、これら 3 つの規準を達成するための具体的な項目を明らかにすることが指導の枠組みを明確化することに繋がり、指導の客観性を担保することになるのではないかと考えられる。そこで、第 2 回研究会において指導者と教員とで実習記録の指導内容を協議し、その研究成果を実習生に検討してもらい実習記録指導のマトリックス表を作成することにした。

３．教員・指導者・実習生 3 者共有の実習記録における指導マトリックス表

2014 年 3 月 3 日に第 2 回研究会を開催し、教員と指導者による「実習記録に求められる指導基準」について検討した。教員 4 名、指導者 8 名が 2 グループに分かれ、実習記録指導の規準として考えられる。(1) 文章形式、(2) 実習ノート表面の記入、(3) 実習ノート裏面の記入についてそれぞれ協議し、3 項目の基準となる内容を整理し、マトリックス表を作成した。この時に指導者、教員、実習生がマトリックス表を活用しやすいよう、「記録に求められる視点」、「押さえておくべき基本事項」、「実習生として身につける事項」に分けて検討を行った。そして、指導者と教員とで協議した内容を実習生に検討してもらい、その結果を論者らが再度整理し、3 者共有の実習記録指導の基準を示すマトリックス表を作成した。

３．１．文章形式の指導基準

文章形式における指導内容の基準として、「記録に求められる視点」としては「1. 何のために記録を記入するのかその目的を考える」、「2. 対外的な記録として適切な形式で記入する」の 2 点が挙げられた（表 1）。前者についての視点は、実習記録が社会福祉士実習においてど

のような位置づけを持ち、活用されるべきものかを理解することが必要といえる。その中で、「押さえておくべき基本事項」としては、「1－1 対外的な文章であることの認識を持つ」、「1－2 事前に習得しておくこと」が挙げられた。「具体的に実習生として身につける事項」として、「1－1－1 人に見せられる文章か確認を行う」、「1－1－2 わかりやすい字で丁寧な字で記入する」、「1－2－1 あらかじめ書き方を教員に教えてもらう」、「1－2－2 普段から文字数に慣れておく」、「1－2－3 日記のような日誌にならないようにする」、「1－2－4 日記にならない記録の仕方を学習しておく」が挙げられた。

後者の「対外的な記録として適切な形式で記入する」については、実習記録が個人の書き物ではなく公文書としての取り扱いを受けるものであり、公文書として耐えうる実習記録を作成するに当たっての最低限のルールを理解しておくことが必要といえる。そのために「押さえておくべき基本事項」としては、「2－1 ボールペンで記入する」、「2－2 実習記録は、人に読みやすい字で丁寧に記入する」、「2－3 文章表現を適切にする」、「2－4 修正個所を適切に修正する」であり、「具体的に実習生として身につける事項」として、「2－1－1 印を押される書類は全てボールペンを使うのだということを理解する」、「2－1－2 下書きの跡は確実に消す」、「2－2－1 誤字・脱字がない」、「2－2－2 漢字で書くべき言葉は調べて適切に記入する」、「2－2－3 文字は丁寧に記入する」、「2－3－1「である」調で記入する」、「2－3－2 話し言葉ではなく書き言葉で記入する」、「2－3－3 改行のルールを守る」、「2－4－1 実習先の原則に従って修正する（二重線と印、修正テープなど）」が挙げられた。

＜表 1　結果 1　文章形式の指導基準＞

記録に求められる視点	押さえておくべき基本事項	実習生として身につける事項
1．何のために記録を記入するのかその目的を考える	1－1 対外的な文章であることの認識を持つ	1－1－1 人に見せられる文章か確認を行う 1－1－2 わかりやすい字で丁寧な字で記入する
	1－2 事前に習得しておくこと	1－2－1 あらかじめ書き方を教員に教えてもらう 1－2－2 普段から文字数に慣れておく 1－2－3 日記のような日誌にならないようにする 1－2－4 日記にならない記録の仕方を学習しておく
2．対外的な記録として適切な形式で記入する	2－1 ボールペンで記入する	2－1－1 印を押される書類は全てボールペンを使うのだということを理解する 2－1－2 下書きの跡は確実に消す
	2－2 実習記録は、人に読みやすい字で丁寧に記入する	2－2－1 誤字・脱字がない 2－2－2 漢字で書くべき言葉は調べて適切に記入する 2－2－3 文字は丁寧に記入する

	2－3 文章表現を適切にする	2－3－1「である」調で記入する 2－3－2 話し言葉ではなく書き言葉で記入する 2－3－3 改行のルールを守る
	2－4 修正個所を適切に修正する	2－4－1 実習先の原則に従って修正する（二重線と印、修正テープなど）

３．２．実習ノート表面（目標・一日の取り組み）の指導基準

実習ノートの表面は、その日の実習に対してどのような目標を設定したのかと、時系列に一日に体験した実習内容の概要とそれぞれの場面においてポイントとなる点を記述することとなる。

求められる視点としては「3．実習生として自分の課題を確認する」、「4．実習の一日の流れや留意点を記入する」ことが挙げられた（表 2）。前者については、一日の実習プログラムは指導者が設定するものであるが、自分自身でその日の目標を主体的に設定することで、実習生が受動的にただ漫然と実習内容をこなすことのないよう意識化できることとなる。しかし、その目標が実習プログラムと連動していないことも多く、その原因は実習施設によってはその日の実習プログラムを当日朝に提示することが挙げられることと、実習生自身が実習プログラムを意識せずに実習前等に想定した目標を機械的に設定していること等が挙げられる。「押さえておくべき基本事項」としては、「3－1 実習計画や進捗状況とのバランスを考えながら明日の目標を設定する」であり、「具体的に実習生として身につける事項」として、「3－1－1 わからない事柄、本日取り組めなかった事柄を次の日の目標に設定するなどの検討を行う」、「3－1－2 前日に次の日の業務を確認し、今日できなかったことは明日の目標にする」、「3－1－3 実習初期は抽象的な課題設定でも良いが、少しずつ具体的に設定していく。例えば、連携とは何かについてさらに学びたいのであれば、連携のどの部分を学びたいのか細かく記入する」が挙げられた。

後者については、実習の一日の流れが的確に記述されていることで一日の実習体験が理解され、その場面において実習生が理解できたこと、指導をうけたこと、実践のポイント等が焦点化・明確化されることとなる。そのため「押さえておくべき基本事項」としては、「4－1 時系列に実習で取り組んだことを記載する」であり、「具体的に実習生として身につける事項」として、「4－1－1 考察につなげるための記入とするため、気をつけたこと、注意されたこと、教えたもらえたこと、学んだことを細かく記入する」が挙げられた。

＜表 2　結果 2　実習ノート（表面）の指導基準＞

●本日の目標

記録に求められる視点	押さえておくべき基本事項	実習生として身につける事項
3．実習生として自分の課題を確認する	3－1 実習計画や進捗状況とのバランスを考えながら明日の目標を設定する	3－1－1 わからない事柄、本日取り組めなかった事柄を次の日の目標に設定するなどの検討を行う 3－1－2 前日に次の日の業務を確認し、今日できなかったことは明日の目標にする 3－1－3 実習初期は抽象的な課題設定でも良いが、少しずつ具体的に設定していく（例えば、連携とは何かについてさらに学びたいのであれば、連携のどの部分を学びたいのか細かく記入する）

●1 日の取り組み

記録に求められる視点	押さえておくべき基本事項	実習生として身につける事項
4．実習の一日の流れや留意点を記入する	4－1 時系列に実習で取り組んだことを記載する	4－1－1 考察につなげるための記入とするため、「何を何時に行った」という内容だけではなく、気を付けたこと、注意された事、教えてもらったこと、学んだことを細かく記入する

３．３．実習ノート裏面（考察）の指導基準

実習ノートの裏面は、その日に設定した目標に対して、具体的な取り組みを含む場面などを記載する事実とそれに対する考察とを分けて記入することがポイントとなる。

「記録に求められる視点」として、「5．体験を全て書くのではなく、目標と関連させ印象に残った事柄を抽出し記入する」、「6．小さな変化を大切にし、背景を考え記入する」、「7．観察記録に加え自身の実践を記入する」、「8．自身の支援の意図を記入する」、「9．自己覚知の視点から記入する」の 5 点が挙げられた（表 3）。

「5．体験を全て書くのではなく、目標と関連させ印象に残った事柄を抽出し記入する」については、記録を記載する時に表面で記載した 1 日の取り組みを再度書いてしまう傾向があり、特に目標と関連させた事柄を選択し、抽出することが必要となる。この書き方を意識することにより、日記のような書き方を避けることに繋がる。「押さえておくべき基本事項」としては、「5－1 社会福祉士に必要な視点を意識する」、「実習生として身につける事項」としては、「5－1－1 利用者の視点、職員の視点も同時に意識する」、「5－1－2 利用者を中心として考え、社会福祉士としてどのように取り組むべきかを意識する」が挙げられた。

「6．小さな変化を大切にし、背景を考え記入する」については、記録を記載する時に、日々

同じように見える取り組みをする中でも、利用者の小さな変化を大切にし、それを捉える視点が重要であることから視点として挙げられた。「押さえておくべき基本事項」としては、「6－1 利用者をよく観察し毎日の変化や感じたことを記入する」であり、「実習生として身につける事項」として、「6－1－1 利用者との会話などを具体的に記入し、その要因について考える」、「6－1－2 利用者の行動の観察や会話から気づいたことや感じたことを記入する」が挙げられた。

「7. 観察記録に加え自身の実践を記録する」、「8. 自身の支援の意図を記入する」については、実習生の取り組みの背景にある考え、考えの根拠を示すことが記録に求められるため視点として挙げられた。取り組みのみを記入してしまうと、その背景にある考えなどを読み解くことが指導者にも難しく、実習生自身が行う行動の背景についても記載することでより考察が深くなることが考えられた。前者の「押さえておくべき基本事項」としては、「7－1 目標に対する取り組みや今後の支援の課題を記入する」であり、「実習生として身につける事項」として、「7－1－1 自分がどこに気づき、支援をどのように行い、利用者がどのような反応を返してくれたか、具体的に記入する」、「7－2－2 家族関係などについても視点を向けて記入する」が挙げられた。後者の押さえておくべき基本事項」としては、「8－1 その日の支援の意図を記入する」であり、「実習生として身につける事項」として、「8－1－1 自身が何に気づき、何を考えて支援を行ったかを記入する」、「8－1－2 自身の支援後を振り返り、感じたことなどを記入する」、「8－1－3 利用者とうまく関係が取れなかった時、なぜそれが難しい支援になったのかについて、その時の状況を踏まえながら書く」が挙げられた。

「9. 自己覚知の視点から記入する」については、実習を通して様々な観点から実習生自身の考え、思いに気づき、振り返ることが重要であるため、「押さえておくべき基本事項」としては「9－1 自己覚知を意識して記入する」があり、「実習生として身につける事項」として、「9－1－1 自身の支援を通して、自分とは何者だろうかという考えを率直に記入する」が挙げられた。

＜表 3　結果 3　実習ノート（裏面）の指導基準＞

記録に求められる視点	押さえておくべき基本事項	実習生として身につける事項
5．体験を全て書くのではなく、目標と関連させ印象に残った事柄を抽出し記入する	5－1 社会福祉士に必要な視点を意識する	5－1－1 利用者の視点、職員の視点も同時に意識する 5－1－2 利用者を中心として考え、社会福祉士としてどのように取り組むべきかを意識する
6．小さな変化を大切にし、背景を考え記入する	6－1 利用者をよく観察し毎日の変化や感じたことを記入する	6－1－1 利用者との会話などを具体的に記入し、その要因について考える 6－1－2 利用者の行動の観察や会話から気づいたことや感じたことを記入する
7．観察記録に加え自身の実践を記入する	7－1 目標に対する取り組みや今後の支援の課題を記入する	7－1－1 自分がどこに気づき、支援をどのように行い、利用者がどのような反応を返してくれたか、具体的に記入する 7－2－2 家族関係などについても視点を向けて記入する
8．自身の支援の意図を記入する	8－1 その日の支援の意図を記入する	8－1－1 自身が何に気づき、何を考えて支援を行ったかを記入する 8－1－2 自身の支援後を振り返り、感じたことなどを記入する 8－1－3 利用者とうまく関係が取れなかった時、なぜそれが難しい支援になったのかについて、その時の状況を踏まえながら書く
9．自己覚知の視点から記入する	9－1 自己覚知を意識して記入する	9－1－1 自身の支援を通して、自分とは何者だろうかという考えを率直に記入する

４．まとめ

教員と指導者それぞれがマトリックス表の作成を通じて指導の取り組みを共有することができ、指導で感じている難しさを言語化したことで、具体的な指導内容を明らかにし、指導基準について理解を深めることができた。

実習生に研究成果を示したことで、今まで教員と指導者の視点のみで検討してきた指導のあり方について実習生を含めた 3 者で検討できたことは、今後の指導を考える上でも重要な機会であったと考える。

また、教員と指導者とで検討したマトリックス表を示す時に実習生に対して、マトリックス表を活用した指導のメリット、デメリットを聞いた。そこでは、活用のメリットとデメリットの両面が指摘された。メリットしては「実習前に見ることにより、実習記録への不安が少なくなる」、「具体的にチェックでき、効率よく学習が進む」、「指導者や教員が求めている記録の書き方がわかり、実習生が持つべき視点が明確になる」ことが挙げられた。その一方で、デメリットとしては「マトリックス表があれば大丈夫と安心してしまう」、「実習前半では活用できるかもしれないが、後半も頼り過ぎてしまい自分自身で考えなくなってしまう」といったことである。

今後はマトリックス表を実際に指導で活用しながら、抽出された課題を踏まえて継続的に3者で検討を続けていくことを行い、実習記録指導のあり方について精度を高めていきたい。

なお、本研究は、「第62回日本社会福祉学会全国大会　ポスター発表」において、発表したものを一部修正したものである。

【注】

[1] 安田・坂下は、2006年度から2008年度までの施設からの実習評価表を分析した。その結果、記録のとり方の評価が低く、課題であると指摘している（安田・坂下2010：105）。

[2] 法改正後の実習に移行する時期の2009年度から2012年度までの実習反省会、実習意見交換会の取り組みは、小川・清水（2014）の研究・調査報告に記載してあり、ここから記録の課題を抜粋した。

【参考文献】

川上富雄（2009）「実習指導方法論Ⅱ－実習教育プログラミング」社団法人日本社会福祉士養成校協会編『相談援助実習指導・現場実習教員テキスト』中央法規：189-192

村井美紀（2014）「第4章　実習スーパービジョン論」社団法人日本社会福祉士会編『社会福祉士実習指導者テキスト』中央法規：267-273

小川智子・清水正美（2014）「〈研究・調査報告〉社会福祉士養成における実習指導体制構築への取り組み－実習反省会・実習意見交換会を中心として－」『城西国際大学　福祉総合学部紀要』第22巻第3号：59-84

小川智子（2015）「社会福祉士実習の事前指導に関する研究」『城西国際大学　福祉総合学部紀要』第23巻第3号：63-79

新村出編（1991）『広辞苑　第4版』岩波書店

田中耕治（2008）『教育評価』岩波書店

安田三江子・坂下晃祥（2010）「花園大学における社会福祉実習の概要と実習評価票の実情」『花園大学社会福祉学部研究紀要』第18号：97-106

The Study on the Instruction on the Practice Record of Consultation Social Work
—Focusing on the Shared Viewpoint of Teachers, Instructors and Trainees—

Tomoko Ogawa, Masami Shimizu

Abstract

This study shows what the instruction on the practice record of Consultation Social Work should be from the shared viewpoint of teachers, instructors and trainees.

First of all, we examined the present situation and the challenges of the instruction on the practice record from 3 points of view. First, we extracted the features and the roles of the instruction from texts. Second, we analyzed the content of the coaching for the instruction on the practice record given at this university. Third, we clarified the challenges of the record that instructors and teachers are facing. From the results of the examination, it was revealed that there's a high possibility that the challenges of the instruction on the practice record stem from the fact that teachers, instructors and trainees see the instruction based on different standards.

Therefore, in the Study Group on Social Work Practical Training, teachers and instructors reviewed (1) the writing style, (2) the front side of practice notebooks (goals and activities of a day) and (3) the back side of practice notebooks (the study in line with goals) in order to clarify the instruction standard required for the practice record. After that, they showed the result of the study to trainees and made an instruction matrix chart that can be shared by teachers, instructors and trainees.

The challenge for the future is to improve the accuracy of the way of the instruction on the practice record while making use of the matrix chart and having discussions among the 3 parties on a continuous basis.

Keyword: social work practice, instruction on the practice, social work practice record